

基地の町に生きた「ハニーさん」たち

— 童心に刻まれた記憶を紙芝居に —

ノンフィクション作家

三山 喬

その昔、東武東上線朝霞駅（旧・埼玉真朝霞町、現・朝霞市）の敷地内外には何本ものサクラの大樹があり、紙芝居師の「金ちゃん」こと田中利夫（八十二歳）はその印象があまりに強すぎるのだろう、遠い日の駅前を絵筆で再現する段には、どんな時期の情景でも背景に満開のサクラを描き込んでしまうという。

米兵と日本人女性

彼がこの日、観客に披露した『ペリー嬢奇譚』の一場面、小学校二年生のとき初めて駅前で「ペリーさん」を見た図柄もそうだった。オリーブ色の軍服を着た黒人米兵の腕のなか、フワツとした白いスカートを

履く日本人の娘が爪先立ちで巨体にしがみつくと。その周囲には薄桃色の花びらが舞っている。

「いまじゃこんな言葉は絶対ダメだけど、あのころはみんな「クロンボ」って言い方をしていました。南洋の冒険小説とか、そんなのばかり読んでいました。南洋朝の集団登校時に抱き合うふたりを見て、私は反射的に『この女の人、クロンボに食べられちゃう』って思いました。それほど強烈な印象だったから、学校から帰ってその女性が自分の家にいるのを見て、『あつ、今朝の人だ』ってすぐわかりました」

いくつもの空き部屋がある彼の家は当時、朝霞駅前で「貸席屋」を営んでいた。もともと閑散とした農村地帯の駅。顔見知りの近隣住民はこの付近で身を休め

たり集まったりする際にここを利用、田中の母親は頼まれるまま人々を部屋に上げ、時には朝一番の列車に乗る人を前夜から無償で泊めたりもした。しかし戦後になり状況は一変した。それまで見なかった「特定の利用者」が突如出現し、田中家ではこれを機に空き部屋敷室を賃貸しするようになったのだ。

「まあ、いまでいうラブホテルですよ」

駅の西数百メートルの距離にある旧陸軍の被服廠跡と、その南に隣接する予科士官学校の跡地。進駐軍がここを接収して乗り込んできたのは、敗戦した翌月の昭和二十（一九四五）年九月のことだった。一帯は瞬く間にバタ臭い「米軍基地の町」に変貌した。「キャンプ・ドレイク」と呼ばれたこの基地は一九七〇～八〇年代に段階的に返還さ



れ、いまやその痕跡はほとんど見当たらない。それでも田中の少年期は約一万人もの米兵がこの基地に駐留した。駅前には常時米兵の姿があり、その周囲には彼らの目を引

こうと、派手な身なりをした日本人女性が溢れていた。

そう彼女らこそ、占領期の風景を象徴する「パンパン」と呼ばれた街娼たちだった。「貸席屋の息子」として身近にその素顔を見た田中少年はしかし、この蔑称を口にしなかった。近年、紙芝居で言及する際も、米兵らの女性への呼びかけ、「ヘイ、ハニー」という言葉から創作した「ハニーさん」という造語を使っている。彼の記憶に刻まれた女性たちは、とにかく優しく情の深いお姉さん。小学生だった田中を見つければ「トシ坊、トシ坊」と弟か甥っ子のように可愛がってくれたものだった。

田中にはその後、中学で力自慢を認められ付けられた「金ちゃん」（坂田金時＝金太郎にちなんだ愛称）という異名もあり、紙芝居の上演ではこちらを名乗っている。

観客は若い女性が大半

そんな「金ちゃんの紙芝居」が四月十四日上演されたのは、東京・向島の「大道芸術館」という施設。公民館や図書館、高校などに招かれて、生真面目な客層に紙芝居を見せることが多い田中だが、この日で